

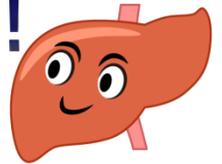
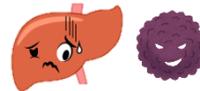
消化器・肝臓センター

NEW 一す NO. 48

2019.6

肝がんに対する新しい治療が始まりました！

根治が難しいがんの一つであった肝がん



肝がんはウイルス性肝炎・肝硬変が原因で発症することが多いがんです。また多くのがんの中でも生命予後が悪い、根治が難しいがんの一つです。その理由は2つあります。ひとつは最初に発生したがんを手術や局所治療で根治させても、多くの場合残った肝臓にがんが再発し再治療が必要になること、もう一つは背景にある肝炎・肝硬変の進行により肝機能が悪化するとがんの治療が段々難しくなることです。

ただ治療やコントロールに難渋する事も多い肝がんですが、最近のウイルス性肝炎・肝硬変に対する抗ウイルス療法の進歩により、発がんの予防あるいは肝機能の改善が図れるようになり、少しずつ予後が良くなってきました。

新薬の登場で肝がんの治療法が変化しています！

加えて、近年肝がんに対する直接的な治療法でも進歩が見られました。それは、「分子標的治療剤」の登場です。肝がんに対する分子標的治療剤としては、今から10年前にネクサバル（一般名 ソラフェニブ）が発売され、内服薬という新たな治療の選択肢が登場しました。

さらに2年前には、ネクサバルが効かない例に対する2次治療としてスチバーガ（一般名 レゴラフェニブ）が認可され、この度1次治療の新薬としてレンビマ（一般名 レンバチニブ）が登場しました。

レンビマ第Ⅲ相試験成績 478例

腫瘍病変	消失	10例(2.1%)
	縮小	184例(38.5%)
	不変	159例(33.3%)
	進行	79例(16.5%)
	不明	46例(9.6%)

肝がん中使用される内服薬



レンビマも、ネクサバル同様に肝炎・肝硬変の程度が比較的軽度であり、手術やラジオ波のような局所治療が困難な肝がん患者さんに使用される内服薬です。レンビマの治験成績では、肝がんが縮小・消失した例は約40%とこれまで以上の効果が報告されています。副作用として主なものは、血圧上昇、皮膚障害、蛋白尿、甲状腺機能障害、全身倦怠感、食欲低下等がありますので、主治医の指示に従って内服していただく必要があります。

これまでは、再発を繰り返す上に進行すると治療が困難であった肝がんですが、新薬の登場で治療法の選択の幅が広がり、今後ますますの予後向上が期待されます。

当院では肝がん治療の専門医が、ガイドラインを鑑み、最適な治療選択を行っています。ご遠慮なくご相談ください。



消化器内科主任部長・
副院長
山田 幸則

※ 株式会社エーザイより提供

市立貝塚病院
TEL : 072-422-5865

